特別海外ゲスト企画

あなたのめざす地域づくりとは？

―― これからのかごしまでピーター・バーグ氏と語ろう ――

鹿児島大学生涯学習教育研究センター　小　栗　有　子

日時：9 月 23 日（木）13：30 ～ 16：30
場所：かごしま市民福祉プラザ５階　中会議室
主催：地球市民教育ネットワーク　KAGOSHIMA 熱闘会議
　　鹿児島大学生涯学習教育研究センター

プログラム

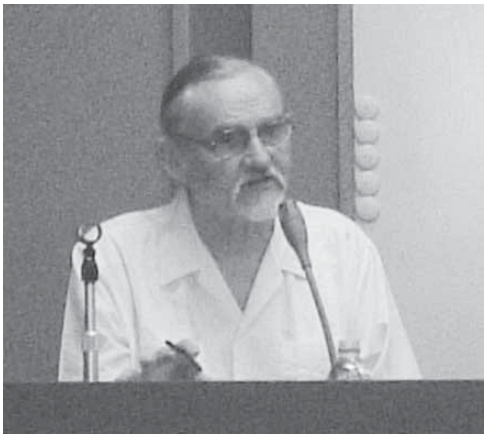
１３：００　受付
１３：３０　開会の挨拶　神田嘉延（鹿児島大学生涯学習教育研究センター）
１３：３５　頭の体操　進行：丸野里美（地球市民教育ネットワーク）
「あなたの考える地域とは？」「あなたの地域づくりにおける役割は？」
１３：５５　講演　ピーター・バーグ氏（プラネットドラム協会代表理事）
「生命地域主義の思想とアメリカの経験
－わたしの考える地域と地域づくりにおける役割－」
通訳：小栗有子（鹿児島大学生涯学習教育研究センター），ジェフリー・アイリッシュ（地球市民教育ネットワーク）
１４：５５　休憩
１５：１０　ダンス・パフォーマンス
ジュディー・ゴールドハーフ氏（プラネットドラム協会）
１５：２５　意見交換（コーディネーター兼通訳：ジェフ・アイリッシュ・小栗有子）
１６：２５　閉会の言葉　小栗有子（鹿児島大学生涯学習教育研究センター）
１７：００　懇親会

ピーター・バーグ氏講演記録

通訳：小栗有子（鹿児島大学生涯学習教育研究センター）

私はこうして講演ができることにワクワクしています。私は，さまざまなコミュニティーの人びとと関わってきましたが，このように地域で頑張っておられる皆さんと会うことができたからです。私はこれからバイオリージョン（生命地域）についてお話しします。そして，そのバイオリージョンがこれからの地域を考える上で何故大切なのか，についてお話ししたいと思います。バイオリージョンというのは，住んでいる地域を生態学的に認識する概念です。それは，自然を構成する要素を全体として見なそうとする，そのような言葉です。これはまた，科学的というだけではなく，文化的，社会的言葉です。この概念の持つ意味は，人間社会がコミュニティーのなかでより持続的に生活しようとするものです。その場所が自然の摂理に従って維持できれば，人びとは持続可能なかたちで生活することができます。すべての人びとは，環境はどういうものであり，また，どうかかわっていかなければならないか知っているはずです。そして，道行く人は，私たちがどうすれば環境に適応できるのか，fit in できるのかということを知っています。21 世紀に入り，私たちは，地球を共に共有する段階に入ってきています。地球のすべてが，人間の生活を含む生物圏から成り立っています。従って，バイオリージョンとは，生物圏の中の私たちの暮らしを考えることを意味します。バイオリージョンは何によって構成されるのか，気候，地理的地形，土壌，水の流域，そしてそこに土着している生物種です。

そして，以上のものと人間が調和をもって暮らすことです。そして，調和のとれた暮らしは，過去の人びとが行なってきたものでした。産業化社会によって自然との関わり方が変わってきました。その一つの大きな理由は，私たちの多くが都市にすんでいる事です。日本では，75％以上の人びとが都市に暮らしています。ヨーロッパ，北アメリカ，オーストラリア，南アメリカでも同じです。現在地球全体で50％の人びとが都市に住んでいて，21 世紀にこの数は今後も増える見通しです。そしてこの変化は大変な変化であり，人類はホモ・サピエンス・都市種になってきています。私たちが持続可能な社会を目指すならば，都市じたい，特に都市の暮らしを変えなければいけません。これが第 2 段階の環境の認識だと言えます。バイオリージョンのなかで，持続的に生きていくことが必要です。私たちの多くの人が都市に暮らすため，バイオリージョンのなかで都市も持続可能でなければなりません。今のお話したことをより詳しくお伝えするために，話を続けていきます。これから地球のいろいろな地域のバイオリージョンのイメージを示したいと思います。このことで皆さんはバイオリージョンの根本が分かるでしょう。



私は今どこにいるか分かりませんが，皆さんは今どこにいるかより理解があるでしょう。しかし，今から私が見せるものによって，皆さんは今いる場所のバイオリージョンのイメージを得ることができるでしょう。この地図には，2 つのバイオリージョンの特徴が見えてきます。（地図１）一つは，湿潤地帯である東海岸，右側の緑色のところが植生を表します。そして，ほとんどのオーストラリアが砂漠であり，乾燥して植生も少ないことが分かります。ほとんどのオーストラリアの人はどこに住んでいると思いますか？そうです，湿潤な緑のところです。これはアメリカの西海岸の地図です。（地図２）これからはいろいろなことが読みとれます。カナダとの国境が非常に人工的なものだということが分かります。そして，西海岸が先程のオーストラリアと同じように湿潤で緑が多いことが分かります。カリフォルニアの海岸は，盆地の形をして緑が多いことが分かります。そして，その北は乾燥地帯です。オーストラリアと同じように 2 つのバイ

地図１

地図２

オリージョンの特徴が見て取れます。ロサンジェルスは下の砂漠，サンフランシスコは上の緑地帯です。北カリフォルニアの緑の盆地の，バイオリージョナルな視座をお示しします。これは日系アメリカ人のアーサー・ナカムラが描いたものです。これは，北アメリカのバイオリージョンです。気候は太平洋に大きく影響を受け，私たちが住んでいる所は寒いところです。そしてその一帯は，東側のシェラネバダ山脈によって構成されています。そして，そのなかの流域に私たちは住んでいます。川はすべてサクラメント川に注ぎ込みます。サクラメントからサンフランシスコの湾へ，さらに海へと注ぎ込みます。レッドウッドの木はここにしか生えていないという特徴的な木です。バイオリージョンが，気候，地形，水，そして動植物によって構成されることが分かると思います。

この地図はイタリアの北部に暮らしている方が，自分たちのバイオリージョンを描いたものです。（地図３）その名前はポー川の流域といい，これはポー川の流域のバイオリージョンです。周りのアルプス山脈，ペニン山脈などの山々からポー川に水が注ぎ込みます。ミラノが西側，ヴェニスが東側にあります。そして，人びとがこれを楓（かえで）の葉の形に描きました。このデザインが彼らの旗となっています。

皆さん鹿児島の方々もこのように簡単に地図をつくることができると思います。ここで地図を描くことも出来ます。ここにすばらしい，詳細な地図をつくることができるでしょう。

２番目にお話ししたいと思っていることは都市のことですが，残念なことに都市は持続可能ではありません。今の

地図３

都市は資源を浪費し，廃棄物を排出しています。持続的であるためには，資源を産出し，ゴミを減らすことが必要です。食料，水，エネルギー，資源，人間の文化。私も都市に住んでいるので，これは私にとっても挑戦です。多くの先進国の都市は，自然と解離しています。ですから私は，もっと自然と近い都市に住みたいと思っていました。そしてエコロジカルな街をつくる試みが，エクアドルで実現することが出来ました。そこで，もっと違うバイオリージョンのイメージである，南米の例を示したいと思います。そして，現地の人びとがエコロジカルな街づくりに努力している様子を紹介したいと思います。このバイクラッシフといい，太平洋に面しています。これがバイオリージョンの特徴である，流域です。（写真１）太平洋の影響を受けています。土壌は粘土質です。植生は乾燥した一帯の特徴を示しています。この都市がエコロジカルな都市を目指すことになったきっかけは，1998年の地震，そしてエルニーニョによって大がかりな土壌の流出が起こったためです。土壌が上の山から流れ出している写真です。この土地は自然に近いので，ここに立つとバイオリージョンをよく観察できます。これが川を流れる水です。これは，少年たちが釣りをしている様子ですが，森から切ってきた木で造った船に乗っています。（写真２）家は，叩いて固くした竹によって造られています。これは，まさに持続可能な暮らしです。これは，大きな都市で，これは市場です。車，電話，テレビなどが見えます。自転車を荷物運びに使っています。タクシーの４倍？自転車は，持続可能な交通と言えるでしょう。これは土壌流出の例です。土が道をつきぬけて下の方へ流れ込んでいます。10 ～ 16m あります。より持続可能な都市をつくるためにまずしたことは，丘を安定的にするために植林を行ないました。斜面の土壌の真ん中で彼女は

写真１

植林をしています。（写真３）これは，非常にエコロジカルな仕事で，ひとつの産業にもなりつつあります。土壌が流出した後は，講演として再生され，木には名前を示す札も取り付けられました。そして，木を見るために土壌が流出したところに階段がつけられています。公園を開園するときに大きな祭りを開催し，男の子がテープカットしています。この公園を単に美しいものにするというのではなく，バイオリージョンとして残したかったのです。これはアリクイムシなのですが，野生の動物がこのように戻ってきています。公園の中に住んでいます。これは蜂の巣です。都市のど真ん中であるにもかかわらず，蝶や鳥が集まってきています。3年でこのように木が大きくなっています。これは公園を通っている横道です。そして，人びとがエコロジカルな公園はどういうものだろうか，と足を運んでいます。例えば，これは明治学院大学の学生たちです。学生たちを私たちは案内しています。学校の子どもたちもバイオリージョンについて学んでおり，これはその成果としてのひとつの作品です。海，大洋，川，丘，そして都市があります。このポスターは人びとに，台所から出たゴミをコンポストにするよう伝えるものです。この男の子たちは，エコロジークラブに所属しています。左側は，バナナの屑は捨てて良いが，缶や瓶は捨ててはいけないと書いてあります。もともと公園のために行なっていたコンポストですが，今は全市を挙げて行なっています。これが通常のリサイクルの様子で，缶や瓶をリサイクルしています。皆さんもリサイクルを行なっているということなので，他の場所でどうおこなっているかを見せたかったのです。

写真２

写真３

これは，女性たちがリサイクルの紙を使ってお花を作っています。今，サンプルをお見せします。この活動は，始め，お金を得ることを目的として始まりました。これはバイオリージョン的な産業と言えます。まだまだ植林をしなければいけないのですが，ここで種から苗を育て，植林する植物を育成しています。そしてこれは，大学生のための仕事の場ともなっています。5年間これに取り組み，5年後大きなお祭りを行ないました。南米のお祭りでは，よく女王さまを立てるのですが，我々は，7歳の女の子を女王様にしました。三輪自転車のタクシーは，エコ・タクシーと名付けています。とても楽しいお祭りで，暗幕はエコロジー・クラブの作製です。このバイオリージョンは外国のイメージですが，このように紹介することで皆さんにバイオリージョンのイメージを持ってもらいたいと思っています。

我々は，バイオリージョンの地図をつくるワークショップもおこなっており，これは青森で行なった時の写真です。そして彼らは，流域，丘，森を描いています。これは，描いたものを紹介しあっています。そこで，私がしたいことは，自然環境のなかでどう人の暮らしが適応するのか，という考え方の手助けが出来れば，と思っています。我々は先進国に住んでいますが，バイオリージョンという視点から見ればどこも同じです。私たちは，持続可能なかたちで生きるために必要なものを獲得するということを考えてゆかなければなりません。食料，エネルギー，水，物をつく

るための材料・原料，さらに文化。エネルギーは再生可能でなければならず，また地域に根ざしたものでなければなりません。原子力や化石燃料ではダメです。そして，都市のなかで食料を生産できなければならないでしょう。缶や瓶や紙だけではなく，都市から出るすべての物をリサイクルし，廃棄物ゼロを目指さなければならないでしょう。そして，文化について言えば，バイオリージョンについて学校で教えてゆかなければならないでしょう。芸術やお祭りもバイオリージョンに関わるものであるべきでしょう。このようなことをおこなってゆく一つの手順として，流域に関わっている人びとが学びのグループを創ることです。そして流域に関わるグループがバイオリージョンの地図をつくり，コミュニティーの人びとに伝えていくことが必要です。そのような動きは世界各国であり，先程見た北イタリアはその一つの例です。そしてバイオリージョン間の，コミュニケーションや交流も始まっています。そしてこのような活動を進めていくと，バイオリージョンが政治的な問題，社会的な問題と関わりをもっていることが分かってくるでしょう。

そこで，地域は，エコロジカルでバイオリージョン的な地域計画をつくることができるのではないでしょうか？集うことで，未来の食料，水，エネルギーをどうするのかという話し合いをすることが重要でしょう。それを通してバイオリージョン的な教育カリキュラム――子どもたちは住んでいる場所について何を学ぶべきか――のビジョンが得られるでしょう。バイオリージョン的な学習のなかには，高齢者――自然と調和した持続可能な生活の仕方を知っている人びと――を含めるべきでしょう。恐らく，皆さんの大きな関心は，生きるための仕事をどう創造してゆけるのかということでしょう。仕事は，リサイクルを通して得るのも一つでしょう。一つの鹿児島の例ですが，公園，例えばベンチなどをリサイクルでつくることもできるのではないでしょうか？プラスティックや鉄など，リサイクルの材料を使うことが大切です。バイオリージョンのグループは，政治家に働きかけながら，バイオリージョンに適した仕組みを作ることが必要になってくることでしょう。市はバイオリージョンに適した産業興し，仕事興しに必要な整備を進めることが必要になるでしょう。

もっとお話ししたいことはたくさんありますが，ここで一旦終わりたいと思います。

文責：小林浩隆

（鹿児島大学生涯学習教育研究センター
リサーチ・アドバイザー）

講演に先立って行われた「頭の体操」の一場面
< あなたの考える地域が「県」だという人
立ってくだされ～い。>

ジューディー・バーグ氏
パフォーマンス

美しい詩を語りながら全身で〈母なる水〉を表現

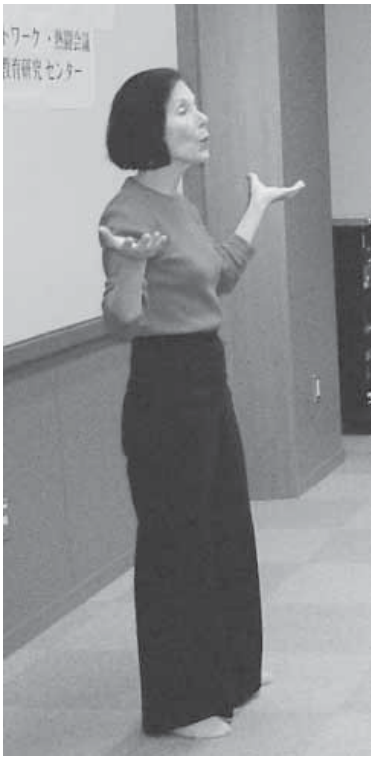
水，それはどのような環境でも形を自由にあやつる。どのような状況にも等しく，形を適応する性質をもつ。月の引力と地球の重力に影響を受けながら，くるくるらせん状に回りながら，周囲の地形にそって下へ下へと移動する。その流れが大地の形を変化させていく。川の存在は，水の量と地形に沿った曲がり方によって決まる。

水は大気へ蒸発する。植物と木に通じて地面から吸収され，葉によって大気へ発散される。雨や雪，あられとなって大地にもどる。水は，モノの中へ入り，外に出るという動きを繰り返す。私たちは，水をすべての生物と共有する。

「マ」で終わる言葉のリストは，すべて「水」をあらわす。MA は，人間が話した最初の言葉。水は，多くの生命が育まれる場所。サケとカエルは水の中に卵を産む。MA －水の母－母なる水。哺乳類の母親は，水の袋で赤ん坊を運ぶ。人間は出産までの 9 ヶ月間，私だけの海の中で泳いですごす。水の母－母なる水は，地球上，そして大気へ出て行く。

水の性質は変わりやすい。その環境が形を決定する。静かな水，深い水，踊る水，地下水，滝，小川，湧き水，渦巻く水，露，霧，雪，つらら，氾濫する水，流れ続ける水。

水は，流れることによって浄化する。バクテリアは日光と酸素によって破壊される。水は走り，踊り，とびはね，岩を越え，岩をまわり，下へ下へと滑り降りて，川を浄化させる。水が浄化をおこなうように，水は，人間自身を清める力をもつ。



流れる水はリズムをもって蛇行することで，スピードを遅くする。川は，複数の蛇行によって自らを縁取り，時に水路は新しく削られ，古い曲線は放棄される。

川底では，水が岸の内側かららせん状に渦巻きながら土を削り，下流へ運ぶ。すべての流れが，このようならせん状と渦巻きによって移動する。

水は，常に私たちのまわり一面に存在する。時には目に見える形で，また時には認識が可能な形で静かに存在する。朝霧，霜 (寒い日のあなたの呼吸)。森の間を通り抜ける川，森の貯えとなる渦を残しながら，また，その年の降雨量の証として。この太陽系の他の場所にも水は存在するかもしれない。しかし，私たちの惑星は水の存在によって定められている。惑星のすべての場所，すべてのものの間を流れ，循環する。

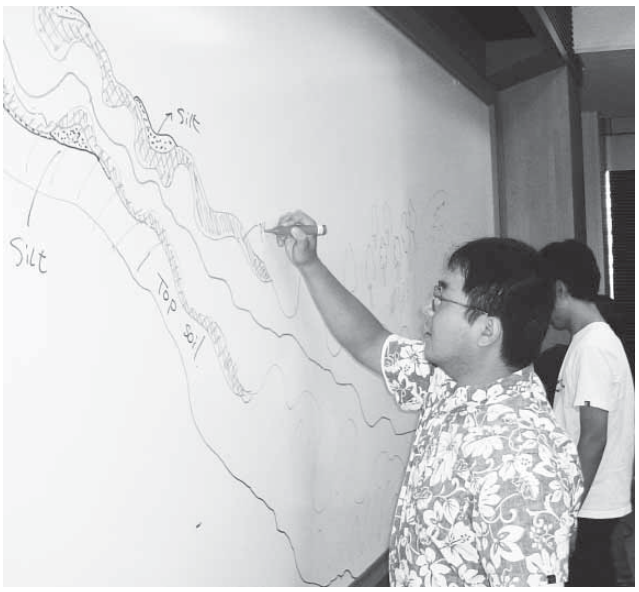
水は私たちの身体，血液，細胞の中を流れ，毎年 17 回更新される。大気の水は 12 日ごとに補給される。有機体のすべては，水との動的な関係を持つ。水は全てを通過しながら流れ，事実上不滅である。水は使用され，また再使用される。クレオパトラは私たちの風呂の水で入浴し，私たちが飲む一杯の水のすべてが，すでに他の誰かによって飲まれている。水は，すべて動物，植物，土壌を通して循環する。将来の人口の限度は，汚されていない水の量によって決まるだろ。私たちは，私たちが通り過ぎるすべての水，私たちを通り抜けるすべての水に責任を持つ。蛇口をひねるたびに，私たちは水循環の只中に足を踏み入れる。あなたの水はどこから来ますか。それはどこに行きますか。それは清潔ですか。

たとえどんなに離れていても，私たちは星を見ることができるし，それらとの関係をもつ。しかし，最も近く，実際的な関係を持つのは，私たちが暮らす近くの川であり，分水嶺である。4000 年前，バビロニア人は，全宇宙を表わすために粘土地図を作り，川が勢いよくその中心を流れる。それは，分水嶺の地図であった。宇宙は…分水嶺であった。私たちは，水をどのように使うのか。また，その水を他のものが使用できるようにどのように戻すのか。そのことに私たちは責任を負っている。

鹿児島のバイオリージョン
甲突川の地図づくり

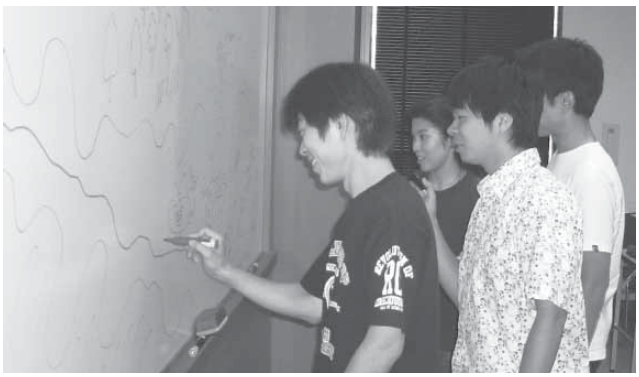
参加者の共同合作で，見事に完成した甲突川を中心とした鹿児島のバイオリージョンの地図

１．鹿児島の中心を流れる川は？なぜ水があるのか。水を作る山があるから…。
２．川の両端にある山【地形】は？
３．次に流域の周辺の土壌は？



４．基盤ができたので次に生物。まず植物。
【水中植物，藻・コケ・草・木】

５．次に動物。ただし固有種のみ。
【水中，昆虫，蝶，両生類，鳥，哺乳類】



６．最後に人口？流域でやっている最悪のこと。
最善のことは？

ピーター・バーグ氏と語ろう！

応答：Mr. Peter Berg
司会：Mr. Jeff Irish

Mr. Jeff Irish：今まで話を聞いてきて，今までとは違う視点を得ることができたなら，それを紙に書いて欲しいと思います。

男性：人間は，人間だけで生きていると今まで思っていたんですけど，今の話を聞いて，バイオリージョンと深く関わりながら生きていることが分かりました。

女性：人類の文明が，流域を中心に発展したということを改めて考えさせられました。

女性：都市に住むようになった人類が，もはや新しい種類，新種の生き物であると認識されている点が新鮮でした。

男性：今は，地球が危ない，水が危ないと言われていますが，こういう環境を人間が破壊して，水が飲めない，空気が汚染されているという状況を考えるに，地球全体を視野に考えないといけないと思います。

Mr. Irish：もう一つ聞きたいのですが，自分はこういう行動ができるんじゃないか，こういう活動ができるんじゃないか，など，考えることがあれば，書いて欲しいと思います。

女性：私は，除草剤を使わないで庭の手入れをしています。草を採るのは大変ですが，それを続けるのは大切だと思いましたので，それを続けたいと思っています。それと，生ゴミを捨てずに，家の庭の花壇に植えております。手間はかかりますが，そういう小さいことをすべてコツコツやって行けたらいいと思います。

女性：　先程，みんなで絵を描いたことにすごく感動しました。そして，今日思いましたのは，自分自身のバイオリージョンを愛したいと，すごく思いました。

女性：　私は，地図を描いて下さいと言われたときに，全然思いつかなくて，いかに周りを見ていないかということを思い知らされたので，やはり自分の環境をしっかり見てゆきたいなと思いました。

女性：　鹿児島では，農薬を使わずに農業をされている方がたくさんいらっしゃって，その方たちがこの間の台風で大わらわらしいんですよ。その方たちが，ボランティアを募集していて，私にも募集が来ていて，もし，今度の土日とか，ボランティアをしたい方がいらっしゃったら，私に声をかけてください。援農です。農家の応援です。

男性：　今日の地図作りを見たり，ピーター・バーグさんのお話を聞いたりして，人が地域での役割を自覚して，郷土に対して愛着というものを持って，自分の住んでいるところを大切にするということが，地球の環境破壊を防ぎ，解決に導いていく一番の根本ではないか思いました。

Mr. Berg：鹿児島は，非常に自然と人間が近い地域だと思いました。名古屋でも地図をつくりましたが，名古屋よりももっといろんなものが地図に出てきました。そして，皆さんの協力体制，そして参加しようと言う意欲に妻も私も驚きでいっぱいです。

Mr. Irish：今度は，会場の皆さんから受けた質問をPeterさんに聞きたいと思います。ひとつは，大都市のバイオリージョンのなか，土地が非常に限られているなかで，「持続可能」がどう可能なのか，特に，農作業がどこで出来るのでしょう？という質問です。

Mr. Berg：大都市では建物がよく壊されたりしていますよね。問題は，建物を壊した後，その土地を

どうするのかということです。政策の上で，土地を何％空けておかなければならないとすることができれば，そこは，コミュニティー・ガーデンとして残すことが出来ます。コミュニティー・ガーデンとは，非常に小さい土地のことで，みんなで共有して使うことが出来ます。逆に，作物としての農業であれば，工場の跡地も考えられるのではないでしょうか？サンフランシスコでは，昔，軍によって使われた施設で，今，キノコを栽培しています。他にも，建物の中で野菜をつくることができるのではないでしょうか？これについては，市民がいかに政治に働きかけてそのような政策をつくってゆくかということが大切なのではないでしょうか？

Mr. Irish：　次の質問ですが，洪水が多いために，川の流れを人工的に変えることに対してどう思われますか？という質問です。

Mr. Berg：恐らく，今ある川の流れよりも，昔あった川の流れがもっと安定していたのではないでしょうか？道をつくることによって洪水がおきるということで，道をつくることで，コンクリートから流れてくる水が洪水を起こすのです。もとの川に戻して，もとの流れに戻せばよいと思います。川沿いの植林ということも含めてです。道から流れる水の管理も違ったかたちにもっていくこともできます。アスファルト，セメントに変わっている面積を減らす努力が必要です。今のアメリカも同じで，コンクリートが増えていくなかで，洪水が今まで以上に起こっています。

Mrs. Berg：　アメリカのある町では，洪水の問題がずっと続いていたときに，川べりにあった家を解体して，川の両側に余裕を持たせ，公園もつくって，洪水が起きても被害が出ないようになりました。そういうことも可能です。人間が川に迫ってきているところで，川にゆとりを与えるということです。

フロアー：　次は，上流に住む人と下流に住む人の関係はどうあるべきか？という質問です。

Mr. Berg：　産業化された社会では，同じ流域の中に住むということについてもっと考え直さなければならないのではないでしょうか？一つは，流域の祭りみたいなものがあれば良いのではないでしょうか？上流と下流に住む人たちが，一緒にイベントをすることが可能でしょう。川下りもできるのではないでしょうか？川沿いで歩くこともできます。マラソンもできるでしょう。そうすることで情報交換のきっかけにもなります。それは，流域のコミュニティーであり，それをつくり直さなければなりません。そのような活動は，よく北米で行なわれています。

フロアー：　鹿児島がつくろうとしている「人工島」についてはどういうふうに思われますか？

Mr. Berg：　ひどい考えですね。それ以上のひどさはないのではないでしょうか？錦江湾のなかに生息している生物にとっては，死の種ではないでしょうか？反対している人からすれば，人工島を進めるひとたちを殺人と呼べるのでは？サンフランシスコ湾の場合は，今まで埋め立て地にお金をかけてきました。今は，それを壊すために市民のお金を使っています。埋め立て地をつくって壊す作業に転換しています。埋め立て地が悪いものだということに気づいたのです。

男性：　バイオリージョンの要素のひとつである水をめぐって，紛争が起こったりする場合，その解決法はあるのでしょうか？

Mr. Berg：　水は，飲用という自分の体のために使う使い方だけではなく，無駄な使い方が多いのではないでしょうか？掃除のために目の前にある

土砂を水で流したり，必要でないところに無駄な使い方がされていることが多いのでは？水が少なくなっていくなかで，水の価値は，考え直さなければならないのではなでしょうか？その一つの考え方として，すべての家で，水の使い方を二通りにすればよいのではないでしょうか？ひとつは，pure な水。もうひとつは，再利用の水。Pure な水は，飲んだり，お皿を洗ったり，お風呂に入ったりする水として使います。その使った水を，フィルターを通して，今度は車を洗うためや，トイレを流す水などに使います。そのように，同じ家の中で，水を循環させる。最初はその考え方は，汚い水を使っているのではないか，と思われるかもしれませんが，トイレ用の水は，一度使った水でも同じではないでしょうか？このように，水のダブル・システムをつくることは，仕事を生み出す元にもなります。そういう意味でも持続可能な社会作りのもとでもあります。

Mr. Irish：　紙に書いてもらった以外の質問があればどうぞ。

男性：　私は，大学時代，カナダで，ネイティブ･アメリカンの人たちと一緒に暮らしながら彼らの言葉を習っていました。今は母校の高校で英語を教えています。一方でグローバルな視点を育みながら，そのなかで，地球で話されている言語は 1 つ 2 つではなく，言語にしても，文化にしても，人びとの暮らしにしても，多様性が大切なのだ，そういう視点を持った上で，君たちが暮らしているところ，その地域固有の文化，価値がみえる，自分たちが暮らしている所以外の場所を見ることで自分たちの文化，価値がみえる，ということが言えます。高校で教えている立場から言いますと，これから社会・世界へ出ていく生徒たちがグローバルな視点と地域に根ざした視点と，どうバランスをとっていけばいいのか，ということについて何かアイディアがあったら教えて下さい。

Mr. Berg：　私がバイオリージョンに関わるようになったのは，まさにそういうことを考えるためです。私たちのアイデンティティーは，人間として同じバイオスフィア (Biosphere) のなかで共存することで変わっていくものではないでしょうか？残念ながら，地球のことを考えることは，自分から遠い世界のことだと考えがちです。しかし，地球は，遠い世界のことではなく，この部屋のなかにあります。そのことは，ネイティブ・アメリカンから学べる事ではないですか？私は，以前地球が悪い方向へ向かっていると考えたときに，それは近代的なものからきていると考えていました。ネイティブ・アメリカンは，昔から，悪い方向にむかっている時期があると考えています。北米には，ユロップという部族がいます。「宗教」は，彼らの言葉では，“World Renewal Ceremony（地球再生の儀式）”といいます。彼らは，地球は毎年再生が必要だと考えています。それは，自分から遠い場所のことを考えるということではなく，自分たちのことを考えるということです。地球環境への畏敬の念を取り戻す，それによってバランスがとれるのではないでしょうか？我々が住んでいる場所は，我々が責任を持つべき身近なところです。地球全体の中に，自分の居場所をどうつくるのか。我々は，Biosphere（全体）のなかに Bioregion（生命地域）を持っているのです。

女性：　このように地図を描いて，自分の住むバイリージョンについて理解をすることがとて

も大事だと言うことがよく分かりました。地図を描いて，そこの植生，地形，生態系についてよく理解した上で，そこに開発の波，開発計画があることを考えると，その地域をよりよくするためにどういうふうにバイオリージョンを開発するのか，その方法が私はよく分からなかったのですが・・・

Mr. Irish：　開発というのはどういう意味での開発ですか？（英語に訳すと言葉が変わってくるので・・・）

女性：　ゼロ･エミッション，ゴミをださないというのが一番の理想だと思うのですけど，どんなにリサイクルしてもリサイクルできない部分は埋め立てたり，産廃処分場が必要だったりするわけじゃないですか・・・ですので，バイオリージョンの思想からすれば，それぞれの地域，地域はだいじな場所だと思うのですね・・・でも，どこかの場所をつぶさないと，私たちのゴミ，負の部分を処分することができないような状況になっていると思うんですけど・・・

Mr. Berg：　よりよく自分の住んでいる地域をしることによって，何をすべきかはみえてくるのではないでしょうか？今，大事と思われることは，もともとから住んでいた人が大事と思うこととおなじではないのでしょうか？鹿児島弁などのように，この地域独特の呼び方を調べることにより，なにが大事か分かってくるのではないでしょうか？人がつくるもの，育てる植物もそうです。Permaculture（＝perma＋culture 永続農業）という農業のやり方もあります。いつまでもそこにあるものとして考える農業です。消費して作れなくなるのではなく，いつまでも作り続けていく農業です。もともとそこにあった植物を育てることが大事ではないか？ネイティブ・フードを復活させるということです。それはトマトを育てることよりも利益があるのではないか。そういった植物をつくることによって，もともとそこにいた鳥も住むことができるのではないか。土作りにも成るし，生態系作りにもなる。それは，今の住んでいる場所を生かすと言うことは，もとの生き方，もとの住み方を勉強することではないでしょうか？

男性：　鹿児島県は，ほとんどの産業廃棄物を他の県に運搬して処理しています。それがほんとうに良いことなんだろうか，と私はいつも思っていて，自分たちの県で出したものは自分たちの県で処理すべきだと思うのです。ところが，自分のところに処理場をつくるのは反対，反対で，できない状態なんです。そこで，どういうふうにすれば処理場をつくることができるのか，自分のところに処理場をつくることでそこの人が不利益を被らない，そういう譲り合いができないものか私はいつも考えています。

Mr. Berg：　その通りですね。

男性：　水についてですが，私はこの様なことを考えたら面白いと思いました。各家庭にお風呂のタブぐらいの水槽を置いて，そこに雨水がたまるようにする，そしてその雨水を水まきや車を洗ったりするのに使います。鹿児島は大地が多いので雨が降るとすぐ水が流れてしまう。そこで，その水をためて使います。そうすることで，Berg さんがさっきおっしゃったような水の無駄遣いをなくす。そういう小さな装置ができたらいいな，と私は思いました。

Mr. Berg：　いいですね。もとアイディアを出して下さい。

男性：　鹿児島は，最近，新幹線が開通しまして，地域も活性化され，非常ににぎやかになってきたと思うのですけれども，芋焼酎や黒豚，黒牛などの地域資源を生かしてどんどん観光客を呼ぼう，そしてその観光客を屋久島，奄美，甑島などの離島へ送り込もうと，観光アップ，のなかでやはりアクセスをつくるため，高速道路などをつくる，などの開発も必要だということは否定できないと思うのですが，先程人工島の話がありましたが，あれを使って中国や台湾などの豪華客船を迎える。鹿児島を世界的に発信するとするとき，みんな「そのとおりだな」と思うところはあると思うので

す。そこを，バイオリージョンとバランスをとりながら考えていく，私は大学で地方自治を専攻しているのですが，鹿児島は日本の中で勝ち残っていかなければいけないと思うのですよ。少子高齢化のなか，生産年齢人口を増やしていかねければならない。その時に，ある程度環境と開発，そのバランスをとりながら一票を決める，憲法にある住民自治を行使する，そういうところを私たち一人一人が意識する。そして，地域のことを知る。そこがまず第一歩ではないかな，とそういうふうに思います。

Mr. Berg：　サンフランシスコでは，観光が一番の産業です。入ってくる人びとは，自然・環境を破壊します。しかし，ひとつ大事なことがあります。すべてのホテルの利用者に税金を課しています。そのお金は，基金に入り，街の芸術活動や，町興しに使われています。完璧ではありませんが，観光とコミュニティーのニーズのバランスをとるための政策だと言えます。持続可能性に繋がる支援になっています。税金の取り方を考えて，入ってくる人たちからお金を取ってコミュニティーのために使えばよいのではないでしょうか？

Ms. 小栗：　Bergさん，今日は本当にありがとうございました。皆さんもお休みのなか，足を運んでいただき，ありがとうございました。

Mr. Berg：　Eco-shima!!（Ecology ＋ Kagoshima）

記録：小林浩隆（鹿児島大学生涯学習教育研究センターリサーチ・アドバイザー）

ピーターバーグ氏は，鹿児島の会合に対する彼の所見をホームページで紹介しています。
次のホームページからアクセスできます。
http://www.planetdrum.org
記事　「A Prescription for Japan’s Cities Finding the Path Off the Road」（Dispatch #2, October 7, 2004 Nortwest Pacific Main Islands By Peter Berg）